

Title	Americanerin の幻惑 : The Bread Givers とユダヤ系女性作家 Anzia Yezierska の沈黙
Author(s)	片瀨, 悦久
Citation	Osaka Literary Review. 40 P.43-P.57
Issue Date	2001-12-24
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/25178
DOI	10.18910/25178
rights	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

Americanerin の幻惑

—The Bread Givers とユダヤ系女性作家 Anzia Yeziarska の沈黙—

片 渕 悦 久

1925年。文化史的にはジャズ・エイジ、文学史的ならばロスト・ジェネレーションと呼ばれるアメリカ1920年代のちょうど折り返し点であるこの年は、同時にアメリカ小説史を概観すれば、稀に見る多産な一年であった。その年出版の作品すべてをカタログ的に網羅するいとまはないが、たとえば、F. Scott Fitzgerald は *The Great Gatsby*, Ernest Hemingway は *in our time*, Willa Cather は *The Professor's House*, そして Theodore Dreiser は *The American Tragedy* をそれぞれ発表し、そのどれもが文学史的正典にあげても申し分のない、いずれ劣らぬ力作として肩を並べた一年と言えは十分だろうか。こうしたきらびやかな顔ぶれとは対照的に、同じこの年に出版されながらも、一度は文学史的に忘れ去られていたとある作家の代表作、それがユダヤ系女性作家 Anzia Yeziarska の *Bread Givers* である。

ところで、Walter Benn Michaels は、1920年代のアメリカ小説が、文化・思想史的影響の面から当時の北欧民族（白人）優越論（nativism）のもとで、新たなるアメリカ的アイデンティティの形成願望とどのように関わっていたかを考察している。以下は、Michaels が1925年をキーワードに主張の要点を述べた部分である。

I will argue that nativism in the period just after World War I involved not only a reassertion of the distinction between American and un-American but a crucial redefinition of the terms in which it might be made. America would mean something different in

1925 from what it had meant at, say, the turn of the century; indeed, the very idea of national identity would be altered. (2)

Michaels は、1925 年をひとつの転換点とした、アメリカ的なるものを希求するアメリカ文学のこうした顕著な動向を“nativist modernism”と命名し、Cather, Fitzgerald, Faulkner, Hemingway らこの時代の代表的作家のテクストを取り上げ、nativist 的イデオロギーの典型的発現形態を検証する。さらに Michaels は、WASP 作家だけではなく、当時のアフリカ系、ユダヤ系などのいわゆるマイノリティ作家へもその考察の対象を広げ、1920 年代アメリカの国家（国民）的アイデンティティが、単に WASP 主流文化へ溶け込むことによってではなく、各移民の人種の差異に基づいて形成される可能性を喝破してみせる。

実は、そうしたマイノリティ作家のひとりとして Michaels が取り上げているのが Yeziarska の *Bread Givers* なのである。物語のヒロイン／語り手である Sara は、東欧系ユダヤ移民の四人姉妹の末娘だが、父親 Reb Smolinsky が行使する伝統的なユダヤ家父長制的抑圧に反発し、自立してひとりのアメリカ人として生きようと努力する。貧しい移民に厳しい現実を前にして、Sara は次々とその希望をくじかれる。しかし、最後には様々な苦難や差別を乗り越え、ユダヤ移民の子供たちの英語教師となり、彼女のささやかな夢はかなう。同時に、Sara は勤め先の学校長 Hugo Seelig と結ばれ、物語は一見幸せな結末を迎えるかに思われる。ところが、彼女はかつて嫌悪した父親のもとへ戻り、Hugo とともに父親を引き取り、生活を共にする決意を固める結末へと至る。

Michaels によれば、Sara が父のもとへ帰る結末は、いったんはユダヤ性を捨てたかに見えるひとりのユダヤ人による、主流アメリカ文化への同化の拒絶である (70)。Sara は苦難の果てに、やはり自分がユダヤ人であることを再確認するのである。たしかにこの幕引きは、“racial identity”を基盤と

する、当時の多元主義 (pluralism) 的なアメリカン・アイデンティティ確認のあり方にふさわしいのかもしれない。もっとも、Michaels がこの作品を引き合いに出した所以は、主流 WASP と非主流移民との対比の構図の中だけで人種的アイデンティティが問題となるのではなく、ユダヤ人社会内部にもまた、移民第一世代と第二世代との間で、伝統的価値観の放棄とアメリカ社会への同化の是非をめぐる確執という形で、一種の “nativist pluralism” (69) が投影されるという点にこそ求められる。したがって、Sara がアメリカナイズされたユダヤ系男性を配偶者として選びつつも、父親と共に暮らすという象徴的な意味合いが込められた行為により、自らのユダヤ人としての起源への立ち返りを暗示する形で物語が結末を迎えることが、1920年代を nativism の言説で括ろうとする Michaels にとって、傍証に適した範例であることは疑うべくもない。*Bread Givers* に対する Michaels の結論を引用しておこう。“Through the restoration of the child to her father, Jewishness is made Jewishness again; the claim to one blood becomes the claim to difference” (Michaels 72).

たしかにこれは正鵠を射た指摘であり、あえて覆す必要はない。しかしながら、本稿で取り組んでみたいのは、単に Michaels の読みを追認することではない。なるほど、Yeziarska を nativist と読むことに一見問題はないように思われる。だが仮にそうだと、はたして Michaels が想定するように、第一次大戦後の移民割当法の時代と共振する nativism の言説から、ひとりのユダヤ系女性作家もまた自由ではなかったという見解を、単純に結論に代えてしまってよいだろうか。そこで以下では、作品出版当時の1920年代アメリカの時代的背景をコンテクストとしてふまえながら、*Bread Givers*、および作者 Yeziarska とアメリカン・アイデンティティ探求のテーマとの関係に新たな光を当ててみたい。

さて、まずはここで Carol B. Schoen 作成の年表および伝記的記述にし

たがって、1920年代前半、とりわけ Bread Givers 出版までの Yeziarska について概観してみたい。1892年ごろ、幼くして家族とともに東欧から移民してきた Yeziarska は、苦学の末に大学卒業の資格を得る。その後 John Dewey と親交を深め、その影響から1910年代終わりには本格的に作家活動を開始している。そして、その後20年代前半までにはいくつかの作品集や長編小説を発表し、それらが好意的な批評を受けたこと、さらには第一短編集がハリウッドでの映画化の権利を獲得したことによって、作家として名を知られるようになり、また経済的にも安定した生活を送れるまでの成功を収めていたのである。言うなれば Yeziarska にとっての1920年代は、少なくともその前半までは、充実した時期であったにちがいない。

ところで、自分の小説の主人公たちと同様に、Yeziarska の人生最大のテーマもまた “Americanization” にあった (Schoen 1-15) ことは間違いない。この点から考えれば、一見彼女はアメリカ作家としての足場を十分に固め、作家としての成功を抛り所に、ひとりのアメリカ人として自己実現を果たしたとする向きもあるだろう。しかし、そうであればなおさら、作者の自伝的要素が色濃く反映していると解釈される *Bread Givers* の、充実した人生に暗い影を投げかけるような結末が、作者自身の実生活での成功とは裏腹に、ヒロイン Sara の自己実現の希望をくじき、不安な将来を暗示するように思われてならない。とりわけ物語の最終パラグラフが次のような一節で締めくくられるのは、この点を象徴的に示していると言える。父親を自分のもとに引き取ることを決め、将来配偶者となる Hugo と手に手を取り合って、とりあえず彼女は父の家を後にする。そのときの心境を、語り手 Sara は次のように叙述している。“But I felt the shadow still there, over me. It wasn't just my father, but the generations who made my father whose weight was still upon me” (297). たしかに、これは楽観的な結語とは言いがたい。極端に言えば、このような視点から小説全体を読み返してみると、彼女の努力は徒労以外の何ものでもなかったと結論づけられてしまうかもし

れない。因襲的なユダヤ人社会に別れを告げ、家を離れ独立し、必死の思いで奮闘する Sara。しかしその人生は、彼女が何よりも望んだ“changed into a person” (237) という境地に達して幸せを約束されるどころか、母親の死と父親との和解なき再会が示すように、結局失敗であったように見える。

そもそも Sara の自己実現は、まずもって自立すること、そしてそれはとりもなおさずアメリカ人になりたいという夢の実現にかかっていた。以下の引用は、この点に関して、素朴な余りまんまと詐欺師の手にかかり一杯食わされて雑貨店経営に失敗した父親との口論から、ついには家を飛び出すに至る場面で、Sara が Smolinsky に言い放つ決定的な一節である。

“My will is as strong as yours. I’m going to live my own life. Nobody can stop me. I’m not from the old country. I’m American!” (138)

父は古い世代のユダヤ人、自分は新しい世代のアメリカ人。自分がアメリカ人であることを確認するために Sara ができること、それは自らのユダヤ性の否定にほかならない。しかし、化粧の仕方や服装の模倣によって、どれだけアメリカ人らしく振舞おうとも、しょせん Sara がユダヤ人でなくなることはない。そもそも自分自身の言葉とは裏腹に、彼女はアメリカ生まれではないのである。それどころか彼女も、れっきとした“from the old country”のひとりにはほかならない。この点の傍証として、たとえば Sara は、生徒たちの発音を直しつつも、実は自分がいつまでもイディッシュ語訛りの英語発音が抜けず、それを Hugo にやさしく諭されるというエピソードをあげることができる。

しかし、このエピソードが結果的に Sara と Hugo とを親しく結びつけ、さらにはふたりが同郷の東欧移民であることが判明するエピソードへとつながり、それをきっかけにして物語は、共にユダヤ人であることの喜びを前面に出すトーンへと変化する点には注目しておく必要がある。Hugo とすっか

り打ち解け、意気投合した Sara はこう語る。“After that, all differences dropped away. We talked one language. We had sprung from one soil” (278). さらにHugoはこう付け加える。“‘You and I, we are of one blood’” (278). 「同じ血が流れている」とは、もちろんこの時代の言説では、共通の人種的アイデンティティをわかちあっていることを表す典型的な言い回しである。ここでは、血統と人種的アイデンティティが限りなく同質のものにとらえられているのである。

こうした物語の展開は、ユダヤ系社会内部における、自民族中心主義的なある種の nativism が浸透していた可能性を主張する十分な証左となるだろう (Michaels 70, 162n127)。なるほど、ユダヤ人の血を引く Sara が、どう逆立ちしても WASP アメリカ人になることはありえない。もちろんこれは、WASP 的 nativism の、人種的差異をアイデンティティの本質的基盤とする考え方から生まれた視点にほかならない。しかしながら、先にあげた Michaels の説をもう一度参照するならば、逆に移民側から見た場合、主流文化・社会への同化の問題が、単に WASP アメリカ文化対周縁の移民文化との相克にとどまらず、たとえばユダヤ移民文化内部においても同様に、新旧世代の対立として顕在化したプロセスが、あらためてここで確認されよう。だとすれば、nativism とは単なる移民排除の思想にのみ立脚するものではなく、より大きな文化的コンテクストにおいて、ユダヤ系を含む非 WASP の各民族集団にとって、きわめて現実的な自己確認の拠り所でもあったとも言えるのである。

さて、上では *Bread Givers* の物語を、東欧ユダヤ移民が激増した時代のアメリカ社会が本質的に帯びていた nativism の問題から検証してきた。ユダヤ系移民にとっての1920年代アメリカ、それは、1880年代以降、主に東欧から大西洋を渡ってきた大量のユダヤ移民が、度重なる移民制限法により高まる移民排他思想に直面し、自らのアイデンティティを見直す必要に迫られた時期にちがいない。わけても、周知のように1924年の移民割当法 (the

Johnson-Reed Immigration Act あるいは National Origins Act) は、1890年の国勢調査をもとに、出身国別住民の2パーセント以内の移民数のみを受け入れるというものであった。これにより、東欧ユダヤ人の主な出身国であるポーランドやロシアからの移民数は、それぞれ4分の1、10分の1までに激減した (Goldberg 159-60)。もちろん、この移民法はユダヤ移民だけを対象としたものではなく、むしろ日本を含むアジア各国からの移民を大幅に制限する意味合いがあったことはあらためて確認するまでもない。しかし、少なくともそれまでの移民制限法のとどめを刺す形で、これ以降、1880年代からの30年ほどの間に総計で200万人を超えたとされる東欧系ユダヤ人の移民に事実上ピリオドが打たれたこともまた事実である。

もっとも、この移民割当法が、旧移民をすべてアメリカ人として認めることを前提とした上に成立したという逆説は看過できない。その意味では、皮肉にもユダヤ人もまたユダヤ系アメリカ人というあいまいな、しかしながら一定のアイデンティティを獲得することができたのである。重要なのは、これが人種の区別を前提としつつ、人種的差異を差異としてそのまま統合しようとするモザイク模様のアメリカン・アイデンティティ形成の契機になったことである。1920年には国人口の約半数を移民第一、第二世代が占め、とりわけニューヨークの居住人口600万人のうち WASP 人口はそのわずか6分の1にとどまっていた (Douglas 304) 状況を考えるなら、nativism が WASP 占有の思想ではなく、各移民集団中心の思想へと読みかえられたとしても当然であろう。こうして、1920年代の時代思潮の基調をなす白人至上主義^{ネイティヴィズム}の言説は、移民排他運動^{ネイティヴィズム}を経て、自民族中心主義^{ネイティヴィズム}へとその意味内容をずらしていったのである。ひとりのユダヤ系アメリカ人 Reb Smolinsky の nativism が強力な影響力をもたらす条件は、この点に求められねばならない。

しかし、これだけで Smolinsky によるユダヤ的ルーツの強調が、そのままアメリカン・アイデンティティの確認につながるという解釈を引き出すの

は、あまりに飛躍しすぎであろう。そこでここからは、Smolinsky の nativist 的ロジックとどのように距離をとりながら、Sara がユダヤ人としてのアイデンティティを探求していくのかという点に焦点を絞り、さらに考察を進めていきたい。

まず確認しておきたいのは、ユダヤの伝統的社会通念に則って言えば、ユダヤ人をユダヤ人と認める条件はいくつか考えられるが、中でも母親がユダヤ人であるという条件は、本質的な区別の方法としてよく知られたことである (Unterman 10-11)。この生物学的出自の問題を、本来ならば宗教的な帰属を抛り所としても不思議ではない Smolinsky がいったいどの程度まで重要視していたか、物語内容だけから読み取ることはできない。しかし、彼が娘たち4人のうち、少なくとも Sara を除く Bessie, Mashah, Fania の3人を、父親としての絶対的権力を行使して、次々とユダヤ人のもとに嫁がせることによって、つまりは娘たちをユダヤ人の妻に、さらに言い換えれば、次代の子供たちの母親にすることによって、生物学的な意味での、限りなく純血に近いユダヤ人の数を増やすことに貢献したのと同等な意味を持つのは疑いない。

生物学的な出自への注目、それはつまり人種的アイデンティティを自己形成の本質的問題と考えることに等しい。したがって、娘たちの気持ちを一切考慮に入れない Smolinsky の独善的な言動は、単に嵩にかかって家父長的権力を振りかざす時代錯誤的な態度ではなく、まさに時の nativism の支配的イデオロギーに敏感に反応した身振りと読めるのではないだろうか。

そう考えるならば、なおさら *Bread Givers* は進歩主義者 Sara と Hugo が、最後には自民族中心主義者 Smolinsky の前に屈する物語とも読めてくる。こうした物語展開が意味を持つ理由は、物語内容の背景となる時代と、作品執筆当時の現実の時代とのずれをふまえると、よりはっきりとしてくる。*Bread Givers* が語り手 Sara の回想の形で描き出す時代は、彼女が10歳から20代後半までの約20年間のことである。この時期が明確に言及されるこ

とはないが、Rockefeller や Morgan の名が典型的アメリカ人の表象として物語に散見されることを考え合わせ、さらには作者 Yeziarska の自伝的要素も加味して推測するならば、おそらく世紀転換期から遅くとも1910年代の第一次大戦前のことと考えられる。進歩主義が支配的イデオロギーであったその当時、移民にとっての理想的アメリカニズムとは、ひとつには Israel Zangwill の戯曲のタイトルとテーマ自体にもうたわれているように、「メルティング・ポット」(melting pot) にほかならなかった。一般に、この場合の同化とは、あくまで各移民集団がWASP主流文化へ溶け込むことを意味し、メルティング・ポットはそのための強力なイデオロギー装置として利用される可能性をはらんでいた。しかし David Biale は、Zangwill の戯曲が一見WASP への同化志向を匂わせながら、結局はすべてをユダヤ性に帰す企図を隠蔽させており、物語はユダヤ性の強調へと収斂していく点を看破する。たとえば聖書を拠り所とするピューリタン・アメリカ巡礼父祖さえも、“spiritual descendants of biblical Jews” (Biale 21-22) となるという具合に。そうなると、メルティング・ポットの概念に込められた進歩主義的思想には、あらかじめ自民族中心主義が内在していたとも読めてくる。

こうして見てくると、Sara がアメリカ主流文化への同化を願いながらも、最終的にはユダヤ人社会への帰属意識を一たとえそれがどれだけ将来の不安を暗示しようとして一再確認するという物語の展開は、人種のるつぼを隠喩とする進歩主義的同化の可能性が実は幻想にすぎず、実現不可能だという現実を強調しているのがわかる。そしてこのことは、Sara と Smolinsky の発想のコントラストという形で、物語に具現化されているのである。

Sara は、父親の権力に屈する形で因襲的ユダヤ人のアイデンティティの中に閉じ込められた姉たちとは違い、自分で自分の生き方を決める、結婚相手も自分で探す、しかもその相手としてユダヤ移民ではなく、「アメリカ生まれの男」を選びたいと言う。

I'd want an American-born man who was his own boss. And would let me be my boss. And no fathers, and no mothers, and no sweatshops, and no herring. (66)

もちろん、Sara の求める相手は、結果的に「アメリカ生まれ」ではなく、移民のユダヤ系男性であった。しかし重要なことは、彼女の決意の言葉に暗示される、自分自身のユダヤ性を捨て去ることさえいとわない同化主義的な発想であり、Hugo もまたそれに沿う形で、ユダヤ移民ながら、きわめてリベラルで進歩主義的な人物として造型されている点である。

あるいは、Smolinsky が娘たちをユダヤ人に嫁がせるというエピソードの方を考えてみよう。物語の時間に則して考えるならば、これは文化的同化をもくろみ、雑婚をむしろ奨励しさえした進歩主義の時代よりも先を進み、人種間雑婚を忌避し純血を守ろうとする、後に反動的な形で有力となる自民族中心主義的な発想に合致するものであろう。ユダヤ人の純血を永続化する夢想へと連なる Smolinsky の考え方は、小説ではいささか誇張して描かれているが、人種的アイデンティティを生物学的出自へと還元する点でも、時代に逆行するどころか、逆説的に進歩主義よりも進歩的だったのかもしれない。そう解釈するならば、彼は進歩主義的な同化志向の娘 Sara よりも、皮肉にも進んだ思想の持ち主であり、作者 Yeziarska は少なくとも 20 年代以前に基盤をおく物語の中に、ある意味で時代を先取りした、きわめて 20 年代的な所作を体現する Smolinsky のような人物を造型し、巧みに配置したとも言えそうである。

「人種のるつぼ」が進歩主義の幻想にすぎないことが判明したとき、当然の結果として、るつぼの中に溶け残る各民族的アイデンティティが一気に析出してくると言ったらよいだろうか。アメリカが目指すべき現実的アイデンティティとは、WASP を中核とする人種の統合から生まれるのではなく、それぞれの民族的差異を容認してなお想定可能な概念でなければならない。

これが、前述したように、第一次大戦後に顕在化する 20 年代的 nativism の中心的言説であり、人種的差異の強調こそが、多文化混成国家アメリカの理想的現実を叙述するにふさわしい所以も理解できよう。*Bread Givers* は進歩主義の時代を描きつつも、そこに 20 年代的言説が外挿されることによって、一見ノスタルジックな物語の中に、あくまで 20 年代 nativism の視点から、人種のるつぼの同化批判の言説が醸し出される仕組みになっているのである。

同化の肯定とその拒絶。しかしながら、二人のユダヤ人 Zangwill と Yeziarska の発想のコントラストは、その深層においては、互に通底した、案外表裏一体のものだったのかもしれない。もちろん、Zangwill があくまでユダヤ系英国人であり、その限りにおいて、アメリカ社会に対して外部的視点しか提示しえなかったとすれば、彼の考え方と、アメリカ生まれではないにせよ、幼くして移民体験を持った Yeziarska の見方とがおおのずと異なっただとしても不思議ではない。しかし、Zangwill がメルティング・ポット概念を、その後の時代思潮の変化に柔軟に対応させ、nativism 的人種観をもあらかじめ包摂する形に書き換えた (Biale 22) のに対して、Yeziarska の nativism は、とりわけそれが主人公 Sara を通して考えたとき、本来はそこから除外されるべき、ユダヤ性の放棄による完全な同化願望をつねにはらんでいたことを見逃してはならない。ここに、彼女が 20 年代中葉にはすでに時代錯誤と化していた、第一次大戦前の同化主義的視点にもとづいて *Bread Givers* を執筆した可能性が見えてこよう。進歩主義のその時代こそ、彼女がアメリカへと渡り、自己形成を果たした時代であったのだ。Yeziarska にとっては、同化の夢、つまりあらゆる差異を乗り越えてアメリカ人になることこそが理想の自己実現にほかならなかつたのである。

しかし、翻って Sara の場合はどうであろうか。皮肉にも、同じユダヤ移民たちの目には、アメリカナイズされた Sara はユダヤ人の宗教的伝統にもとづいた生活のあり方を冒瀆するものにしか映らない。母親の葬儀で、身内の者がその衣服の一部を切り取り、棺に入れるという伝統的儀式を、Sara

がただひとり拒否したことに対する周りの者たちの反応を、語り手はこう回想している。“A hundred eyes burned on me their condemnation. ‘Look at her, the *Americanerin!*’” (255). イディッシュ語訛りの「アメリカ人」を表すこの記号は、ユダヤ人でもなければアメリカ人でもない Sara のアイデンティティのゆれを指し示してやまない。Carol J. Batker は、*Bread Givers* について触れた箇所、教師という職業がユダヤ移民の子供たちを教化し、Americanization への道のりを容易にする役割をになっている点に特に注目している (120)。なるほど、Sara はユダヤ人でもアメリカ人でもないのかもしれない。しかし同時に、*Americanerin* はそのどちらでもありえることを暗示する。だからこそ、Sara は移民次世代の子供たちにアメリカニズムを伝える媒介者となる資格を得たと考えてもよいのではないだろうか。

言ってしまうと、*Bread Givers* は主人公がアメリカ人になろうとしてなれない物語である。Sara の自己実現、それは *Americanerin* が暗示するように、はかない充足感がもたらした錯覚にすぎないのかもしれない。しかし、社会的同化の願望と人種の差異の保存願望が複雑に絡み合うこの小説の物語世界においては、Sara の一見宙ぶらりんな自己実現こそが、この時代のもっとも現実的なアイデンティティ確認の方法であったのである。逆説的な解釈かもしれないが、Sara は自分がユダヤ人であることを認識することによって、はじめてアメリカ人であるという意識をもつことができたのではないだろうか。人種の差異を基準としたアメリカン・アイデンティティの成型。それは Sara の場合も、自分がとりもなおさずユダヤ人であり、なおかつアメリカ人でもあるという、解きほぐしがたい二重の意識の受け入れへと結実する。

もちろんこのことは、Biale が主張するように、たとえば Zangwill のマルチング・ポットの概念と、その批判者である Horace Kallen の文化多元主義 (cultural pluralism) とが、ともにユダヤ人の “At once part of the American majority yet also a self-chosen minority” (32) という二重性を暗示する点で表裏一体の関係をなすということを考え合わせると、

なお一層納得がいくだろう。そして、まさにこの二重性こそが、そのまま *Bread Givers* の物語世界の特質をも言い当てていることを忘れてはならない。さらには、John Dewey が実は Kallen に大きな影響を受けていた (Cohen 39) ことを知れば、すでに伝記的事実として確認できるように、Dewey との親密な関係がかつて結んでいた Yeziarska もまた、Dewey を通じて多元文化主義的思想に通暁していた可能性をも十分に推察できるはずだ。そうであればなおさら、Yeziarska が作品執筆当時の時代状況に敏感に反応していた点もあらためて新たな解釈として指摘できるだろう。つまり、*Bread Givers* は、多元文化主義と自民族中心主義との絶妙のバランスの上に成り立つ物語なのである。ユダヤ人がアメリカン・アイデンティティを探求しながら、ユダヤ性を再認識するに至るという物語展開は、決して一枚岩的ではなかった1920年代アメリカニズムの現実のイメージにふさわしい。

さて、結論として確認したいのは、*Bread Givers* がユダヤ人の移民体験を懐古的に描き出すノスタルジックな物語ではなく、きわめて時機を得た 20 年代的テキストであったということである。そして、この適時性は、華やかなる 20 年代アメリカ文化の裏側の、progressivism と nativism とがいまだせめぎあう言説空間で、ひとりのユダヤ系作家が直面した、自らのアイデンティティ確認の問題から生まれてきたものであった。この点から、Yeziarska が時代に即応したこの作品をもって、作家としてのピークを迎えたのも偶然でないことが、本稿の分析で理解されたと思う。

しかしながら、国家アメリカ自体が繁栄の 20 年代から苦境の 30 年代へと向かい、急激に下り坂を駆け下りていく運命をたどるのと呼応するかのようには、Yeziarska もまた、*Bread Givers* 以降、30 年代前半までにさらに二つの作品を発表しつつも、作家としては徐々に沈黙していくことになった点も指摘しておくべきだろう。1920 年代が体現した物質的豊かさが、精神的自己探求を促す契機となったと言えるならば、不況下の 30 年代アメリカでは、

物質的困窮のために、精神的自己探求自体が棚上げにされ、代わって社会改革的役割を担った文学が前面に出ることとなったのも当然の流れであろう。Yeziarska は、あるいはそうした社会状況さえも敏感に察知して、文学の表舞台からは身を引いていったのだという推測も、あながち的外れではないかもしれない。

だが、もしかするとこれさえまた、時代の必然だったのだろうか。20年代前半、作家として一躍脚光を浴びたとき、「スウェット・ショップのシンデレラ」(“the ‘sweatshop Cinderella’” [Batker 112]) とも呼ばれた Yeziarska。思えば、この隠喩的連関は適切なものだったのだ。なにしろ彼女は、ひとつの時代の終焉を告げる時計の鐘がなる前に、姿を隠さねばならなかったのだから。*Americanerin* と American をどこまでも差異化しつつ、同時にまた限りなく表裏一体の幻影に見せてしまう、進歩主義と自民族中心主義との交錯が織り成す魔法が解けるその前に。

Works Cited

- Batker, Carol J. *Reforming Fictions: Native, African & Jewish American Women's Literature and Journalism in the Progressive Era*. New York: Columbia UP, 2000.
- Biale, David, Michael Galchinsky, and Susannah Heschel, eds. *Insider / Outsider: American Jews and Multiculturalism*. Berkeley: U of California P, 1998.
- . “The Melting Pot and Beyond: Jews and the Politics of American Identity.” Biale 17-33.
- Cohen, Mitchell. “In Defense of Shaatnez: A Politics for Jews in a Multicultural America.” Biale 34-54.
- Douglas, Ann. *Terrible Honesty: Mongrel Manhattan in the 1920s*. New York: Farrar, 1995.
- Goldberg, David J. *Disconnected America: The United States in the 1920s*. Baltimore: The Johns Hopkins UP, 1999.
- Michaels, Walter Benn. *Our America: Nativism, Modernism, and Pluralism*. Durham: Duke UP, 1995.

Shoen, Carol B. *Anzia Yeziarska*. New York: Twayne, 1982.

Unterman, Alan. *The Jews: Their Religious Beliefs and Practices*. Rev. ed.
Brighton: Sussex Academic P, 1996.

Yeziarska, Anzia. *Bread Givers*. 1925. New York: Persea, 1999.